

すみだ地域学情報

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaiyakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい活力 ゆとり

すみだ

第6号

2008年
(平成20年)
12月発行



We!



向島金美術館（昭和40年代）



さよなら都電38系統（昭和47年11月）

（写真協力 緑図書館）

すみだが歩んだ歴史

墨田区の誕生からいまをたどる⑥

「おもてなしの心」で すみだを案内

墨田区を訪れる観光客の皆さんを、「おもてなしの心」でお迎えするため、「すみだ観光ボランティアガイド」の皆さん約40人が活動しています。

皆さんは、あらかじめ申込みを受けた団体（5～10人程度）に同行し、区内の観光資源を案内して、墨田区の魅力を多くの人々に伝えてきました。

ボランティアガイドは、NPO法人すみだ学習ガーデンが隔年で実施する「観光ボランティアガイド養成講座」を修了した方々が中心となって、「すみだ観光ボランティアガイドの会」を結成し、定例的に研修するなど、活動の充実を図っています。

詳しくは、墨田区文化観光協会（☎5608-6951）にお問合せください。



昭和30年代（前号のつづき）から40年代へ
戦後の復興を遂げた後の昭和39年（1964年）10月、アジア初の東京オリンピックが開催され、区内でも聖火リレーが行われました。

また、同年7月から42年7月にかけて住居表示が改正され、現在の26町、104丁、2,962街区（番地）となりました。
この改正により、堅川が立川に、厩橋が本所に、寺島町が東向島に、隅田町が墨田、堤通に、向島押上町、向島中之郷町、向島請地町等が押上に、吾嬬町東が東墨田、立花、文花に、吾嬬町西が八広、京島、押上になるなど、町名も改名されています。

区では39年、勝田菊蔵区長が退任し、山田四郎氏が新区長に就任しました。
30年代から40年代にかけて、区内の生活環境の改善が進んでいます。水門の整備や防潮堤の建設により、水害への備えが強化され、また下水道も整備されました。

その一方で、40年代になると、時代の流れのなかで、区内から姿を消すものもありました。
35年ごろ、区内には23区で最多となる6,700余の工場が操業していましたが、40年代になると、さまざまな規制強化などによって移転する工場が増え、明治以来82年の歴史を有する鐘紡東京工場（所在地は堤通）も44年（1969年）に閉鎖されました。

また、47年（1972年）11月、自動車の増加による交通渋滞などから、福神橋―月島間の都電が廃止されました。明治36年（1903年）12月に区内を走りはじめ、昭和31年（1956年）の最盛期には8系統を数えた路面電車の歴史を閉じたのです。

さらには、向島地区から映画館が姿を消しています。28年（1953年）に放送が開始されたテレビの普及率は、40年代には90パーセントを超えたこともあり、46年（1971年）1月、向島金美術館（東向島一丁目）と吾嬬国際劇場（立花五丁目）が廃館となりました。

震災と戦災、その後の都市化の進行に伴い、かつての豊かな緑の大半が失われたことから、区では緑の回復をめざして、47年（1972年）3月、緑化宣言を行い、以後区民の皆さんとともに緑化を推進しています。

52年（1977年）9月には、緑化のシンボルとなるよう、区政30周年を機会に、「区の木」にさくらを、「区の花」につづじを選定しました。

また、区では49年2月、山田区長が退任し、新区長に山崎榮次郎氏が就任しました。

その後、50年（1975年）4月に区長公選制が復活し、山崎氏が新区長に当選しました。

953年）に放送が開始されたテレビの普及率は、40年代には90パーセントを超えたこともあり、46年（1971年）1月、向島金美術館（東向島一丁目）と吾嬬国際劇場（立花五丁目）が廃館となりました。

震災と戦災、その後の都市化の進行に伴い、かつての豊かな緑の大半が失われたことから、区では緑の回復をめざして、47年（1972年）3月、緑化宣言を行い、以後区民の皆さんとともに緑化を推進しています。

すみだの下町文化創成のまちづくり



【パネリスト】高橋 久雄氏（新タワー建設推進協議会会長）
佐原 滋元氏（向島百花園「茶亭さはら」亭主）
雨宮加主子氏（向島墨堤組合長）
山崎 昇氏（墨田区長）

【コーディネーター】宮崎 里司氏（早稲田大学教授）

宮崎氏 それでは、まず山崎区長に開会にあたりお話しいただきます。

山崎区長 最初に、なぜこの「すみだ地域学セミナー」を実施しているかお話しさせていただきます。

三年後に新タワーが完成しますと、日本はもとより、外国からもたくさんのお客様が墨田区にお見えになります。来てよかったと気持ちよく帰っていたことが、大切ではないかと思っております。

もうお亡くなりになりました東京大学名誉教授の木村庄三郎先生が随筆のなかでこのようなことを書いておられます。

「世界にも日本にもたくさんの観光地がある。その観光地にもう一度行ってみたいと思う要因は三つある。一つ目はその地域が防犯上あるいは治安上も安全であること。二つ目に、その地に名所だけではなく、おいしい食べ物があること。三つ目は、その地域の皆さんの温かいおもてなしの心。この三つがあれば、その地へもう一度行ってみようという気になる。」

墨田区は治安も防犯ももちろんよいわけで、江戸時代から受け継いだ、いろいろなおいしいものもあります。さらに下町の人情のおもてなしの心がある。と、大勢の方にもう一度来ていただける町になります。

おもてなしの心というのは、もちろんあいさつも大事でしょうが、墨田に来た方が「これはどこにありますか」と尋ねられ

たら、区民の皆さんが、「さあ、それは知りません」では困るわけです。「ここにありますよ」とご案内していただくことが大変重要で、そのために自分の町、住んでいる所について勉強し、お客様にお話しただければ、これはすばらしいことになるのではないかと考えます。

早稲田大学の公開講座に「すみだ学」という講座があり、私もその講座でお話したのですが、受講者には墨田の方はいらしゃいませでした。

そこで、こうした講座を墨田区でも開講しようということ。で、このセミナーを始めました。

宮崎氏 それではパネリストの皆さんに、現在の活動や新タワーへの期待をお話いただきます。

高橋氏 墨田区は「関東大震災」と「震災」という二回の再生のチャンスを活かし、今日の町を築いてきました。

今回は山崎区長さんによって、新タワーの誘致という、墨田区にとって大きなチャンスが引き寄せられました。是非とも区民の皆様にも立ち上って頂かなければならないと思います。

タワが建つことによって、経済的効果は非常に大きいと予想はできますが、地域の皆様が積極的に関わっていただかないと経済的効果の恩恵を受けることはできません。

お隣の浅草には海外や地方から多くの人が集まりますし、食事しようと思ったら、店がいくらでもあります。その浅草に対抗するにはどうしたらよいかを考



えていかなければなりません。タワー建設推進協議会や東京商工会議所も、地域の再生や活性化を図るために、このチャンスを活かして行きたいと考えております。

佐原氏 昨年10月に、平成光勸進プロジェクト実行委員会がサーチライトを照射し、新タワー建設予定地の夜空に、610mの光のタワーを描く「光プロジェクト」を実施しました。その時の光が見えた方は会場にいらっしやいますか。

あのプロジェクトの最大のねらいは、自分たちが見てみたいということもありますが、自分の住んでいる所から新タワーがどう見えるか体験してもらい、これからの町について考えてもらいたいという志でやったわけです。6月1日からすみだ生涯学習センターのプラネタリウムでも、新タワーのある墨田の町のイメージを投影していますので、ぜひご覧ください。

雨宮氏 私はここで生まれ育ちましたので、どっぷりと墨田区につかっており、なかなか良い

所が見えないところもあります。世界一のタワーができることは、伝統文化を引き継ぐ墨田を知っていたら最大のチャンスだと思っております。

多くの人が集まりますと、人の流れも雰囲気も全部変わってまいりますので、特に向島の花柳界がもっと注目されるのではないかと思っております。

向島の花街は江戸時代からあり、いま東京で一番大きい花柳界で、料亭が17軒、芸者衆が120人近くおります。

向島踊りはしばらくやっていませんので、新タワーに古典のものがでる劇場をぜひつくっていただき、毎年発表ができることを希望しております。

これから人の温かさや文化を守り、安全で住みやすいまちになるように、期待しています。山崎区長 新タワーができたからと言って、墨田区を観光の町に変えてしまおうとは考えていません。

これからの墨田区にはものづくりをきちんと残していかないといいませんが、それだけでは地域の経済を活性化することは難しい。そこで観光という視点を入れて、将来に向けて墨田区の経済の活性化を考え、新タワーを誘致したわけです。したがって、これからのまちづくりのキーワードは、下町文化と新タワーとの融合をめざして、「下町文化創生」としたいと考えています。

（シンポジウムの一部を再現しました）